<u> 13K -</u>	以[170子仪計测貝科]							心田小子仪	
学校 経営	:	令和6年度の達成基準	自己評価(中間)					自己評価(最終)	学校関係者評価
経営		(12月アンケート肯定的回答の割合)	達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	自己評価の適切さ
「心プロ	①思いやりの心と自己肯定感を高める。(心優しい子供) 「元気」「やる気」「根気」を合言葉にお互いの頑張ったことを見つけ認め合う関係をつくる。また期間限定で「すてき(気)」の花を咲かせる取組も行い、思いやりの心を育てる。	児童90%以上 〇「友達を大切にしている」保護者	児童97%	A	・「元気」「やる気」「根気」の葉っぱを書く活動の意欲が継続できるように、たくさん書いている児童を紹介したり、良い葉っぱを紹介したりして、多くの友達の良いところを見つけ、自分の良いところも見つけられるようにする。 ・今年度も人権週間中に「すてき」の花をさかせる取組を行い、友達の良いところを見つける力を育てる。		A	・「元気」「やる気」「根気」の葉っぱを書く活動に、児童が 進んで取り組み、思いやりの心や児童の自己肯定感を	・自己評価は適正である。 ・3つの葉っぱの取り組みは有効である。自分の良いところに気づくことができれば人のいい面にも気づけるように
ジェクト	(②児童と周囲の人々との繋がりを 豊かにする。(心優しい子供) 異学年、異校種の交流による学 びやビアサボートを充実させ、上学 年の自覚を育むとともに、交流す ることの楽しさや達成感を味わわ せる。 ・幼稚園、中学校、高校との交流 ・市内の小学校との交流 ・支援学校との居住地校交流	○「他の学年や他の学校園と一緒 にする学習は楽しい。」児童90% 以上	児童100%		・授業や学校行事、休み時間などで <u>異学年交流の機会を継続</u> して作っていく。 ・児童の実態や学習活動に合わせて <u>SEL教育を充実させ、児童のさまざまな人との交流を自信をもって楽しむことができるようにする。</u>	児童97%	Α	・学習した成果の発表、なかよし班を中心とした掃除や遊びなどの異学年交流を行った。また、低学年と幼稚園、中学年と支援学校、高学年と他校高学年などの異校種交流も行った。様々な交流を通して、児童と周囲の人々との繋がりを豊かにし、児童が主体的に活躍し、お互い学び合うことができたと考える。 ・児童の実態や学習活動に合わせて、具体的な場面を想定して、SEL教育に取り組むことができた。その結果、児童は交流に自信をもって取り組んだり、日常生活に生かしたりすることができたと考える。	・SEL教育は、実際の場面で使えたり、よりよい人間関係作りに有効であると考えるので、継続してほしい。
ノロジェクト	の良い挨拶ができる児童を育成する。(礼儀正しい子供) 生活リズムカードや週目標等の意識づけにより習慣化を図る。 と は 2 2 2 2 2 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	○「家庭や地域で進んであいさつ をしている。」 児童・保護者・教職 員90%以上		В	・主にメディアコントロール週間を通して、生活習慣について児童だけでなく保護者も一緒に考えるきっかけとなり、昨年度よりも改善傾向が見られる。引き続き、児童への指導だけでなく、保健だよりや、学級懇談、個人懇談において保護者への啓発を図りたい。 ・挨拶に関する評価項目は、児童は大多数がA(あてはまる)と回答したのに対し、保護者は大多数がB(だいたいあてはまる)と回答した。上記と同様に、児童への指導だけでなく、地域と連携した挨拶運動などを通して、保護者への啓発を進めていきたい。	児童93% 保護者93% 児童93% 保護者81% 教職員93%	В	・生活習慣に関わる質問への回答は目標基準を満たしていたが、一人一台端末の使用方法について何度か指導することが今年度はあった。デジタルシティズンシップ教育を計画的に実施し、児童だけでなく、保護者への啓発も同時に図っていく。 ・挨拶ができているかどうかという点について、児童の自己評価と保護者や教職員の他者評価に開きが見られるように感じる。どんな挨拶が望ましいのか具体的なモデルなどを示しながら、客観的に自身の挨拶を振り返ることができるようにしていく必要がある。	・あいさつについては子どもはできているつもりでも、保 護者の認識は厳しいと感じる。子どものできていないと保
	『みんなでチャレンンフンキンク』 や『体力アップ・マイベストチャレ	をするのか好きた。」児里90%以上 〇「外で遊んだり、新体カテストに	児童87%	В	・毎月の体力アップイベントや大学連携のイベントなどを通して、体を動かす楽しさを味わう機会を継続的に設けたことが有効だった。引き続き行いたい。 ・まだ自分から外遊びや体力向上に向けた運動をするのは消極的であったため、教師側から毎朝の握力チャレンジなど全員で参加できるような活動を取り入れるようにした。まずは取り組むことを通して、自分たちが体力向上に向けて努力していることを認識できるようにしたい。	児童93% 児童83%	В	・運動をすること自体への苦手意識はそこまでない様子なので、引き続き休み時間の外遊びを推奨していきたい。 ・新体力テストに向けて目標を立てているがこのような回答結果が出る辺り、目標を立てて終わってしまっている可能性が高い。測定日の1週間前だけでも、毎日立てた目標の運動ができたかを担任が追うようにして、目標に向かって頑張ったという実感を得られるようにする。	・自己評価は適正である。 ・長距離走はやる気をもって行うことは難しい。ペアを作って1人が走る、1人は応援するというのをやってみてもいいかもしれない。応援されると頑張る気持ちが大きくなる。それによって自分の記録が伸びることで自信にもつながる。
(学研	①子どもが主役の授業や活動をできるだけ多く設定する。児童が「考える」「選ぶ」「決める」場を作り、それに基づいて実施し振り返り、成果と課題を明らかにする。		100%(A72%B2 8%)		「委ねる」授業・学校行事などでの活動を大切にしていく。 研究授業での学びを普段の授業改善に生かすようにす る。	97% (A83%B14%)	В	「委ねる」授業作りについての考え方が定着してきた。 「委ねる」場面については、さらなる研究が必要である。	・自己評価は適正である。
ひプロジ	章 ②毎週火曜日と木曜日の朝学習 ○の時間(15分間)に基礎学力定着 を図る。 ○運筆練習(1年生) ○計算 ○漢字	朝学習ので取り組む漢字の書き取りや計算練習で、前回の記録と同じまたは上回ることができた児童90%以上★	た児童は1学期 計算4/29 漢字5/24	С	り強く取り組んでいくことを大切にしたい。数値に表れにくいところでの個人の成長を感じることはできている。登校後の準備が主体的にできるように、支援していきたい。よ	月の初めと終わりを 比べて、記録が同じ かよくなっている児 童の割合 100%の学年(計算) 9月1・10月5・11月4 (漢字))9月2・10月 4・11月2		集計の仕方を変えたところ、左のようになった。文章による振り返りでは、非認知能力に関する言葉が見られた。 続けていくことで、自分の成長に目を向けることができる ようにしていきたい。	・自己評価は適正である。
ノト)	(3)読書活動を推進する。 は、おすずめの本リストの活用」と「読 書マラソン」の記録によって視覚化 を図る。 ・教室に「おすすめの本」を保管し、 手に取りやすくする。 ・読書を週末の宿題に位置付けて、意識付けを図る。	○「読書が好き。」児童 90%以上	93% (A69% B24%)	Α	・読書を週末の宿題に位置付けていることで、本に親しむ時間を確保することができた。(1・2・3・4・5・6年)家庭学習と連携して取り組むことを続けたい。・読書週間に広報委員会の取組を計画している。児童主体の取組で、読書を自分事にすることを狙いたい。・毎週水曜の朝読書では、低学年は「おすすめの本」に取り組んだ。読書の木にシールを集める仕組みは有効だった。			・委員会活動と連携することで、児童が自分事として考えることができやすくなるのではないか。 ・「読書マラソン」の数値を調べて表彰する取り組みはよかった。 ・メディア週との連携で、表彰する取り組みもよかった。 (読書時間に意識が向きやすかった、)	・自己評価は適正である。
プロジェクト)	施設)や学校支援ボランティア等を活用した体験活動を充実させる。 (総社を愛す子供)	○「地域の方との交流は楽しい。」 児童90%以上	児童96%		・1・2年生で野菜作りと茶摘み体験、3・4年生で池田いいとこさがし、5・6年生は拡大熟議で地域の方と関わったり学んだりする機会をもった。今後は拡大熟議で話し合った内容について、実現をめざし取り組んでいく。	児童97%	А	・拡大熟議での話合いをもとに、池田わくわくふれあいデーを開催し、地域の方と交流を深めることができた。今年度は参加希望をとり全員参加とはならなかったので、来年度は全員参加できるよう教育課程に年度当初から組み込んでいく。地域の方への広報活動を早めに行い、たくさんの方に参加していただけるようにする。	・自己評価は適正である。 ・今年度の「池田わくわくふれあいデー」では、いい取り組みができた。 ・学校だけでなく地域でお祭りのようなことができないか。 その中の1部として学校に参加してもらうとよいのではないか。地域づくり協議会にも働きかけていく必要がある。
	②ホームページ、学校だより、学級 通信、すぐーる等により、学校や児 童の様子を積極的に情報発信す る。	極的に発信している。」保護者・	保護者100% 教職員100%	,	・今の取組を継続していく。 ・地域や学区外の方に、より見やすいホームページになるよう改善していく。 ・児童の学習の成果を発信する場としての活用を模索していきたい。	保護者100% 教職員100%	А	・今の取組を継続していく。 ・地域全体への広報活動として、ホームページを見ることができない地域の方にも向けて回覧板を有効に活用していく。 ・地域や学区外の方に、より見やすいホームページになるよう改善していく。 ・すぐーるの地域登録者数を回覧板で回すなどして増やす。	法で広報活動が必要である。今後もホームページでのお知らせや公共施設への掲示依頼など、引き続き行っていただきたい。 ・地域への広報については回覧板を活用するとともに、